

Я а у

著 ミカミ

編集 rea, 十六夜大尉

Я
а
у

楽園は天と地のぶつかり合うところ、その狭間に広がる少女たちの空を指して言うのだった。時刻は早朝、晴れ晴れと冴え渡る空に雲はなく、ただ煌々と日を投げる太陽だけがそこにあり、先を争って吹き過ぎる凍った風の中を、弾丸のような黒い影が一直線に切り裂いて彼方へと消えていく。黒い流星の朝だった。

星は人だった。少女の形をしていた。その身にまとった大仰な帽子も長いスカートも癖の強い髪も何もかもが荒れ狂う風にはためいていながら、瞳だけが真っ直ぐにひとつの場所を見据えている。流星は名を霧雨魔理沙と言って、楽園を裂いて飛ぶにはただ古びた箒が一本あればよかった。

少女は、焦りとともにあった。

わずかに唇を噛み締めている。実を言えば昨日の晩からろくに眠っていない。魔理沙は妖怪のうろつく夜半を避け、朝日が登るのをひたすらに待って幻想郷の空に飛び出した。

眼下の森がわずかに様相を変えた。

一段、高度を下げる。

魔理沙は星を見るのが日課だった。だから「偶然に」それを見た。何度も何度も思い返した昨日の夜のその視界を再び魔理沙は脳裏に呼び出す。時間にして数秒、後になって考えればまるで幻のような一瞬の空の変化。

星ではない何かが夜空に映ることはままある。それは単なる雲であり、魔法の森を住処に

する夜行性の鳥であり、あるいは大小さまざまな妖怪変化の類いであったりした。しかしそのどれとも説明のつかないことが、あるとき魔理沙の視界には起きていた。

この目に見たものに嘘はない、自問自答を繰り返すほどに魔理沙の確信は強まっていった。

あの一瞬、確かに空には、幾筋もの巨大なひびが走っていた――、

森を見下ろしていた魔理沙の視界を、その時、一筋の赤い構造物がかすめた。目に映ったそれを認識するかしないかというタイムミングで、魔理沙はすでに箒の頭を垂直に近い角度で地面へと向けていた。落下に等しい軌道で地面に吸いこまれていく少女は、その刹那に考える――あれは夢まぼろしの類いじゃなかった、確かにあるとき空は割れた、そしてそのひびは、空そのものが直接割れたようには見えなかった、あれはそれよりもずっと高度の低い、この幻想郷を覆う「何か」に起きた異変のように見えた――、

憶測に憶測を重ねたその思考を、砂上の楼閣と切って捨てることはたやすい。だがその脆弱な憶測の先にはひとつの明確な人影が像を結んでおり、それは魔理沙のよく知る少女の形をしていた。焦る理由も急ぐ理由も、その一点で十分だった。

すなわち、あいつとあの結界に何かが。

一瞬の思考が終わり、魔理沙は垂直落下から一転、爆発的な魔力を箒の先から放出、力任せのL字軌道をえがいてその赤い「鳥居」をくぐっていた。

博麗神社の見知った境内に、嵐のような過激さで魔理沙は降り立った。乱れに乱れた髪と

服を気にもとめずに、決然とした瞳で視界の先を見つめる。時代をものがたる石畳、古いばかりで貫禄の足りない社殿、凶体だけは一丁前のぼろぼろの賽銭箱、周囲を深々と埋め尽くす木々——神社は相も変わらぬ平穩無事な姿でそこにあった。

ように見えた。

魔理沙の足元から続く石畳の先に、こちらに背を向けたまま真っ直ぐに立つ人影があり、綱渡りのような日常がそこで途切れていた。

心臓を、冷たい手に掴まれたような感覚が魔理沙に走った。

顔を見なくともそれが誰であるかはわかった。背を向けた彼女の腰からは、太い金色の尻尾が群れをなして下がっていた。魔理沙の知る限りその特徴を持つ妖怪はひとりしかいない。そしてそんなやつがよりにもよって今、ここにいるということ自体が忌避すべきひとつの事実には違いなかった。

よくないことが起きている。

存在がそう語っている。

「驚いたな」

そして、わずかに低い女の声で、非日常はつぶやいた。

息を呑む音は魔理沙自身のものだった。

重そうな尻尾を揺らして妖怪は振り返った。細く鋭い瞳がこちらに向けられる。敵意はな

いが、馴れ合う素振りもない、透明な視線を無言のまま魔理沙は受けとめる。

「黒い魔女は必ずここに来る——ただの冗談だと思ったのに。紫さまも食えないなあ。あれでなかなか、人を見ているんだから」

「……お前は不吉だ」

妖怪は、どうにも噛み合わないといった調子で後ろ頭を小さく掻いた。

「嫌な挨拶だな……そりゃあ不吉だから妖怪やってるんだ。元々そういうものだろ。鳥のくちばしをなじるのと一緒だ。そんなのは意味がない」

「違う」

苛立ちは不安の証明だった。口早に魔理沙はまくしたてる、

「お前はあの紫と違って、何の意味もなくこんなところに来ない。お前がここにいてってことはここで何か起きたってことだ。そのくらい私にだってわかる」

そうだ、どうしてこんな時にこいつがここに。

八雲藍と言えば、幻想郷の妖怪退治に一枚も二枚も噛んできた魔理沙にとって知らないはずのない名だった。飼い主である八雲紫が神出鬼没の存在である以上、その式神である藍もまた、本人の意思とは別にありとあらゆる場所へ姿を見せる。しかしたったひとつ飼い主と式神の間に相違点があるとすれば、それは、ただふらりと現れるような放浪を目的に、藍はほとんど動きまわらないということだ。命じられねば動かない妖獣と飼い主との、それが決

定的な差だった。

つまり今、八雲藍という式神は、何らかの目的をもってここにいるということになる。そしてその「目的」の部分に、魔理沙はゆうべの空の亀裂を掛け合わせずにはいられない。当然の不安が、不確定要素の追い風を受けて爆発的に膨れ上がっていく。

藍は切迫した魔理沙の言葉をじっと聞いていた。そして聞くだけ聞いたかと思うと幾分のんびりした調子でため息をついて、

「紫さまが人を見るのと同じくらい、お前は妖怪を見ているな。ダメだぞ、そういうのは……こっち側になってしまっぞ、そのうち」

式神のその余裕が魔理沙は気に食わなかった。一切の言葉が無視して手短かに告げる、

「霊夢に会いに来た」

「知ってるよ」

答えは間髪を入れずに返ってきた。その返答の早さに魔理沙は鼻白みながらも、

「いるんだろ」

「いる」

「何で出てこない」

どころか、声も出さない。

普段の霊夢ならば、ありえないことだ。「何よさつきからうるさいわね」——それだけの

不機嫌な彼女の言葉を、何よりも今は切望していた。しかしあの妖怪の形をした非日常の向こうで、そこにいるはずの少女を隠す博麗神社の社殿は、死そのもののような沈黙を呑みこんでひっそりと動かない。

妖怪は、どうということもないように魔理沙に答えた。

「確かめればいい、そこにいるから」

藍は背後の建物をくいと指で示し、幾らかの疲れをにじませた様子で空を見あげて細いため息をついた。

「夜通し手当てして、さっきようやく安定した。大した呪いだった。さすがの私も疲れたよ」呪い。

藍の口から当たり前のようにこぼれたその言葉に魔理沙は動揺し、すぐにでも問い詰めた思いを、しかし、今は捨て置くほかになかった。それより万倍も急ぐべきことがその向こうにあった。金色の髪を揺らして立っている妖怪の横を足早にすり抜けて、魔理沙は古い社殿を左に回り込み、見慣れた縁側に靴を脱いで上がりこむと、閉ざされた障子に歩み寄り、手をかけ、

一呼吸分のためらいをおいて、

開けた。

目に飛び込んできた光景は、警戒していたものよりは穏やかだった。荒らされた様子的な

い部屋、いつも通りの畳敷きの居間に一枚の布団が敷かれ、そこに、博麗霊夢は静かな呼吸とともに眠っていた。

表層的な平穏はそこまでだった。

霊夢は、ただ眠っているわけではなかった。そこに本来あるべきものの欠落をいち早く魔理沙は感じ取った。

——これを本当に霊夢と呼んでいいのか。

確かにそこには霊夢の顔があった。

しかしそこから先、布団に隠されながらも続いているはずの彼女の身体の厚みが、どこをどう見ても人ひとり分に足りていないとは思えない。

「……霊夢、だよな？ 生きてる、よな」

その通り、確かに霊夢は生きている。その証拠に呼吸もしている。その寝息は、見る限りにおいては確かに安定しているように見える。しかし何かが足りない。どうしようもない違和感がある。魔理沙はその正体を確かめるために霊夢にかけられた布団を剥がそうとして、畳の間に上がり込み、ゆっくりと手をかけて、

二呼吸分のためらいをおいて、

開け

「見ない方がいいよ」

魔理沙の手がぴくりと震え、中途半端なかたちで止まった。

「……どうということだ」

いつの間にか魔理沙の背後に立っていた藍に、尋ねる。

「まあ、取り立てて言うべきことはない」

「それなら、」

「首から上はな」

「……………」

今日という日の始まりから、絶えず魔理沙の背中をおびやかし続けていたものがある。

それは初め、ぼんやりとした影のかたまりに過ぎなかった。時間を追うにつれ、この場所を指すにつれ、ありとあらゆる不穏の兆しをその目に刻むにつれて、影はいつしか質量を増し、確かな輪郭を獲得し、そして今、この瞬間の藍の言葉をもってひとつの解答へと結実した。

そして、魔理沙は問うた。

「……死ぬのか？ 霊夢は」

ややあって、藍が答えた。

「ひとまず出来る限りの治療はした。人間は本当にもろい生き物だな。死んだだけで死ぬとなるとやりづらくてしょうがない。でもとりあえず、危ないところを抜けるまでは漕ぎつけ

た。そこは請け合うよ」

そこまでを聞いて、魔理沙は細く長い息をついた。ひとまず霊夢が、死ぬことはない。陰性の安息とでも言うべき長い沈黙の後で、魔理沙は再び口を開いた。

「説明、してくれ」

霊夢の命が助かったことは、何にも優先して喜ぶべき事実だ。だがそれだけですべてを納得できるはずはない。一度でもその危機に霊夢がさらされた経緯を、どうあっても確かめる必要がある。安堵が、暗い怒りと狼狽に置き換わっていく。

「何で霊夢はこんなことになってる。こんなことにならなきゃいけない。部外者の私にもわかるように全部話してくれ」

背後の藍は、わずかに居住まいを正すようにして、言った。

「全部話せば長くなる。一言で言うならばそう……巫女の務め、だ」

魔理沙はわずかに目を見開いた。

言葉を、見失った。

「……何だ、それ。それが理由か」

小さな拳をぎりぎり握りしめながら、影をはらんだ平坦な声で魔理沙は言う。

「私と同じ年の、まだ十五年も生きてないやつがわけのわからん呪いで身体をめちやくちやにされてそれを全部布団で隠されてこんな場所に転がされていることの、それが理由なのか」

長い髪に隠れた魔理沙の瞳は、死んだように眠る霊夢の顔にのみ向けられている。

いつかそういうことが起こるかもしれない、とは思っていた。霊夢の役目は元来そうしたものだ。護る者の背中に当然付きまとう危険。妖怪退治と結界の守護は、ひとりの少女の肩には重すぎるほどの責務だ。だが目の前の「これ」は、そのどれとも違う不条理を、無理やり押しつけられた結果なのではないかと魔理沙は思った。これはただ結界を守るだけで、暴れ回る妖怪を調伏するだけで起こりうることなのか？

藍は、この文字通りの女狐は、そうした不都合な部分に蓋をした結果として、「巫女の務め」などという白々しい口上を並べているだけではないのか。

「お前も紫もそうだ。大変なことは全部こいつに押しつけて、あることないこと後から言っているだけなんじゃないのか。博麗の巫女なんて名前は、お前たちがつけた都合のいい呪いの名前だ。そうすれば全部うまくいくんだ。霊夢ひとりの犠牲で、何もかもうまくいく。

……くそ、何でこんな……」

「それが霊夢という役割だ」

この時ばかりは、強い口調で藍は言い放った。

「別に言い訳をするつもりはないよ。私たちはこの世界そのものを人質にとっている。ここに住むすべての人間と妖怪を盾に霊夢を脅している。こいつが命を張らなきゃいけない理由はそれだけだ。他には何も無い。お前がやらなきゃみんな死ぬ……そう脅して戦わせている

のは事実だけど、でもこれだけは言っておく。——それでも霊夢は、霊夢自身の望みで命をかけている」

頭が真っ白になるのが、自分でもわかった。

立ちあがっていた。振り返り、無言のまま背後の藍に詰め寄りその胸倉を掴み、鼻と鼻がこすれあうほどの距離で相手の瞳を睨みすえた。全身の血が沸き立ち、荒い息を噛み殺すだけで嘔みたいな力が必要だった。

「……仕向けたんじゃないのか。そう願うように、お前たちが」

妖狐は、百年の昔に固まったような決意の瞳で、魔理沙を見返していた。

「本当のことだ。嘘を言ったつもりはない。殴るなら殴れ。それで気が済むのなら、殺すつもりでやればいい」

「……………」

「誰かがやらなくちゃいけない。守らねば壊れてしまう世界だ、ここは。その望みをお前は、ろくに知りもしない頭で作り物と言いつ切るのか」

「……………」

掴みあげていた手から、ゆっくりと力が抜けていくのを魔理沙は感じた。

意志は、何も魔理沙ひとりだけのものではなかった。烈火のごとく燃えていた怒りはいつしか消え去り、あとには静かな無力感だけが残った。自分が何ひとつこの状況に干渉できて

いないという感覚。どこまでも部外者でしかない自分に対する不可抗力的な諦念。

「……霊夢は、ずっとひとりでこんなことをしてたのか。表向きの異変とは違うところで」
手を離し、眠り続ける霊夢に向き直って魔理沙はつぶやいた。その声のどこにも、先ほどの力はなかった。

「今回のは特別だ。こういうことが今の今まで、まったくなかったとは言わないけど」
藍は魔理沙の横に並び、目の前に敷かれた布団を見下ろして静かにその場に座った。

「……霊夢は、勝ったのか。勝って何かを守ったのか」

藍は静かに首を横に振り、

「勝っても負けてもない。引き分けだ。やつはまだ残っている。ただそのおかげで、私とお前はこうして何事もなかったかのようにここで話ができる」

全部霊夢のおかげだ、

「紫さまも、私も感謝している。だが霊夢は立てなくなった。すべてを元通りに治すまでには時間がかかる」

「霊夢は、何と戦ったんだ」

「それは言えない」

隣に座る藍の横顔を、不可解な面持ちで魔理沙は見つめた。

「知られることそのものがあいつの力になる。霊夢が何と戦ったのか、どうしてこんな目に

遭ったのか、私たちの目的は何か——教えてもいいけど、それには条件がある」

そうして、眠り続ける霊夢の顔に目を落としたまま、藍は言った。

「戦える人間を探してる。飛べなくなった霊夢が飛べるまでの間、この幻想郷を守る人間を」

沈黙をもって、魔理沙は先を促した。

「黒い魔女は必ずここに来る、と紫さまは仰った。それは意味のある言葉だったんだろう。お前が霊夢をどれだけ大事にしているかも今のことでわかった。実力については今さら訊くまでもない。確率は私の専門外だが——その上で、賭けてもいいだろうと、私は思っている」

十

生きる世界が違うことは、ずっと前からわかっていた。

霊夢は「お役目」の中にいた。それはすなわち、脈々と受け継がれてきた巫女の歴史の波濤に、霊夢は身を任せているということだ。今さら流れを遡れるはずもない。別の流れに移るわけにもいかない。それはそう決まってしまうことで、「お役目」の名のもとに、博麗霊夢はこの幻想郷の結界を、ひいてはこの世界そのものを守っているのだった。

そして幼い魔理沙は、別の波濤の中にいた。

里の本店《おおだな》の娘に生まれついた自分に違和感があった。もっと他にやれることがあると思つた。しかし母親がそうであつたように、自分もまたこの家に男を迎えて子を産み、店の名前を次代に繋いで消えるのが「お役目」だつた。それが霧雨の名の本質だつた。幼いながらにそのどん詰まりの未来を考えると、魔理沙はたまらない気持ちになつた。奔放なこの好奇心が、あまりに画一的で矮小な器に押し込まれてしまうことが、死ぬことよりも怖かつた。

だから自分は、流れの外に飛び出すことを選んだ。

自分は一度逃げ出した身だ。そうするほかに「生きる」を得る道がなかつたから。あとになつて考えればいくらでもやりようはあつたのだろう。だが不器用な自分には与えられたものを拒むことしかできなかつた。ひたすらに自由を求めて駆け抜けた先に巨大な罪の鎖が待ち受けていたことを知つても、魔理沙は逃げ続けた。

しかし霊夢は、逃げなかつた。

弱い自分が「お役目」を捨てて逃げてからも、霊夢はずっと博麗の巫女として在り続けた。どころか歳を重ねるごとに美しくしなやかな、何物からも自由な少女へと成長していった。

魔理沙は思つた。

私は逃げた。けれど霊夢は、そうしなかつた。私よりもずっとずっと重いものを背負いながら、あんなにも綺麗で、あんなにも楽しく生きている。どうして、何が私とあいつの間で

違うのだろう。

確かめたい、と思った。

自分は光にはなれない。けれどもそれを追いかけることはできる。間近に浴び続けた光が、いつか自分の闇を洗い流してくれるのではないか——魔理沙は、思った。

「私が、戦うのか……？ 霊夢をこんな風にしたやつと」

「頼めるのであれば、是非に」

眠り続ける霊夢の横に、魔理沙と藍は並んで腰を下ろしている。木漏れ日の差し込む神社の居間はかつて幾度となく霊夢と魔理沙の語らった場所であり、穏やかな日常の象徴であるはずのこの場所は、しかし、今、濃厚な死の気配に包まれていた。

「もちろんすぐにでも承諾してくれるなら話は早い。けどお前としてはそうもいかないだろう。それに、勇み足は蛮勇のもとだ。話せる範囲で、私もお前に情報を伝える。その上で、断ると言うなら私はお前を引きとめない」

魔理沙は一度深く呼吸をすると、

「……話を整理したい」

藍は、沈黙を返事にした。

「霊夢は敵と戦って、引き分けた。その代償に動けないほどの呪いを負った」

「ああ」

「敵はまだどこかにいる。倒さなきゃいけないが、霊夢は動けない。他の誰かが戦う必要がある」

「そうだ」

「そこで……私に霊夢の代わりにやれと？」

「適任だと思ってる」

藍は、言葉少なにそう告げた。

「まず、人間である、ということが大前提だ。私たちのような妖怪——存在の基盤が不安定な者は、まずもって勝てない。どころか取りこまれて、やつの糧にされてしまう」

「食われるのか」

「そんなところだな」

「私なら、食われないんだな」

「そうとも言い切れない」

魔理沙は、静かに眉をひそめた。その変化を知ってか知らずか藍は言い淀むことなく続ける、

「今までにそういうことがなかったってだけで。だがおそらく、可能性は限りなくゼロに近い」

「……………」

聞けば聞くほどに、実像のぼやけていく相手だった。おそらく「それ」は人間ではない何か——神や妖怪といった類いのものだろう。しかしそれさえも確かめるまでは可能性の域を出ない。ただひとつ確かなことは、あの霊夢をして相打ちに持ち込むのが精いっぱい相手であるということ——魔理沙は考える、

そんな化物を相手に、私が戦えるのか？

一方的な殺戮や蹂躪を戦いとは呼ばない。曲がりなりにもそこに攻防が存在し、互いの命が賭けのチップとして機能している状態、そこに初めて戦闘という言葉が使われる。少なくとも霊夢は善戦した。普段の弾幕ごっこはそもそも舞台の違う、文字通りの命がけの戦闘を五分にまで持ち越した。勝てないまでも、生き延びた。そして霊夢は倒れ、残ったカードは、魔理沙に渡った。

なぜ、私に？

「他に、私よりも強い誰かに、任せることはできないのか」

怖くないと言えば嘘だ。それは魔理沙の中の揺るがぬ真実だった。ゆえに消極的な言葉が口をついて出た。霊夢は、戦った。でも自分は、戦えないかもしれない。下手をしたら死ぬかもしれない。そのことが、どうしようもなく怖くて、怖くて、今すぐにでも逃げ出してしまいたかった。

藍が、口を開いた。

「霊夢以外に、お前より強い人間なんているのか？」

魔理沙は目を見開いて、横に座る藍を振り返った。

「私は当然の損得で動いている。どうすればあの化物を倒すことができるのか、倒さぬまでも向こう数十年分の力を奪うことができるのか。それを今、もつとも的確に為しうる位置にいるのが、お前だ。霊夢という天才を相手にあれほど張り合ってきたお前なら、可能性は十分にある」

「……そんな、私は」

「強いよ。たったひとりであいつと渡り合える程度には」

「……………」

藍の瞳は、策士の瞳だった。どこか遠く、ここではない空間に視線を投じて賢者の式神は語る、

「あいつは知られることで力を増していく化物だ。こいつで勝てなかったら次はこっち、なんて悠長にやっていたらいいよ手がつけられなくなる。戦いは短期決戦が基本だ。一番強いやつを、一番初めにぶつけて、逃げきり同然に勝つ。……そのためにお前の力を、借りたい」

藍の最後の言葉は、わずかに弱々しかった。本人も意識すらしていないほどのその言葉尻の余韻に、魔理沙は窮地を押し隠す者の悲壮な影を見た。

「……もし、私が」

弱々しい声が、魔理沙の口から漏れた。

「もし私が、勝てなかったら？」

「別の誰かがお前を引き継ぐ」

「勝てるのか？ 私が一番、強いんだろ。知られたらダメなんだろ。もし負け続けたら」
藍は、何でもなしのことのようにひとつ息をついて、言った。

「その時は、もう一度霊夢を出す」

「……は？」

理解が追いつかなかった。

こいつは今、何を言った？

少なくともそれは、たった今藍が口にしたような、軽々しい言葉であってはならないはずだった。

「まさか……お前、この怪我のまま霊夢を戦わせるっていうのか？」

かぶりを振る藍の素振りには、本来そこにあるべきはずの後ろめたさの影さえ見当たらない。

「さすがにこれよりは治すよ。だけど状況の推移によっては、これに近い状態で痛み止めのまじないをかけて送り出す可能性もある」

「……………」

たとえば、叫んだり掴みかかったりするような種類の怒りであれば、それはまだ可愛い。

真の意味での怒りと驚愕が、超えてはいけなないある一点を超えると、赤い炎が温度を増して白く変わるように、感情の彩度を失う。魔理沙はそれを、己の体感で知った。

「……………今のでわかった」

沸点を超えた怒りの先の、侮蔑に満ちた視線で魔理沙は藍を見やる。

「やっぱりお前たちはどうしようもなく、化物だ」

「……………違う」

魔理沙の怒りに、答える声があった。

「これは、人間の生み出したひとつの合理の形だ」

白く燃える魔理沙の胸に、氷のような言葉が突き刺さった。

「犠牲が避け得ないものであるならば、それを可能な限り最小化し、同時に救えるものの数を最大にまで近づける——私たちは本来、そうした概念を持たない。その思考は、紫さまがお前たち人間から学び、私に伝えたものだ」

「……………」

「大したもんだよ、人間というのは。人の道と書いて人道……ぬけぬけとそんな言葉を使いながら、一方ではこんな冷酷な決断もする。本当に学ぶところの多い生き物だ」

魔理沙は唇を噛んだ、

「……その、たったひとりの犠牲が、霊夢か」

「ああ。だがそれはお前が負けるか、逃げるかした場合の話だ」

話が、迂遠な皮肉を経由してすべての始まりに戻ってくる。

「勝て、魔理沙。それだけの話だよ。それですべてが変わる。何もかもが閉じた輪の中に収まる」

霧雨魔理沙は、その存在そのものがひとつの岐路なのだった。自分がいまここで何かを選ぶということ、あるいは何も選ばないということさえ、この世界の存立を脅かすことに繋がってしまう。とんだ冗談だった——笑い飛ばすことさえできないほどの。いったいいつから、自分がそこまでの重要人物になったのだったか。

「……もし」

つぶやく、

「もし私が負けて、霊夢が負けて、それ以外の全員が負けることになったら——」

「結末はひとつだ」

そして、深淵のごとき言葉が、藍の口からこぼれ落ちた。

「幻想郷は滅びる」

針のような沈黙が、あった。

「お前も、私も、もちろん霊夢もみんなまとめて消えてなくなる。それが結末——博麗霊夢の引き伸ばした未来だ」

「……………」

——嘘だよな。

なんて、言えるはずもなかった。

それはおそらく、事実だ。まだ誰も見てはいない、それでもそこに存在することの疑いなき、可能性の未来。

握り合わせた魔理沙の手が、小刻みに震え始めた。震えを、止めようと思った。恐怖する身体を抑えつけられ、心もそれに従ってくれるはずだった。両手をさらに強く握り合わせる。押し殺した息が荒くなる。冷たい汗が背中を伝い始める、

絶望が内心を支配する、

どうしようもなく震える手が、どうしても止まってくれない。

——私が負けたら、みんな消える？

何だそれ。何でそんなことになってる。それじゃあ戦うしかないじゃないか。私が戦うしかないじゃないか。どこにも逃げることなんてできないじゃないか。私が霊夢の代わりに敵の前に立って、死ぬ思いをして勝つ以外に、一体今、何を選べるといふんだ？

負けたら死ぬんだろ？

戦わなくても死ぬんだろ？

私じゃなきゃ、ダメなんだろ。

——ちくしょう。

何で私じゃなきゃ、ダメなんだ。

「本当の」魔理沙なら、そんな弱音は死んでも吐かないはずだった。

かつて何度も思い描いた想像の世界の自分は、命がけの困難にも敢然と立ち向かい、例外なくこれを打ち破ってきた。その夢の中において魔理沙は誰よりも強い。あの霊夢すら差し置いて幻想郷の異変を次々と解決し、ついには他に並ぶ者のない最強の魔法使いへと成長する。実力と名声は、互いが互いを助け合うようにして魔理沙の背中をさらなる高みに押し上げていく。

あなたにしかできない。

君のおかげで助かった。

お前じやなきやダメなんだ。

そんな言葉を、心地よい夢の中で幾度となく聞いた。

そして魔理沙は、今この瞬間の現実に繋ぎとめられた魔理沙という少女は、かつて想像の世界であれほど渴望した言葉を、震える両手と冷たい汗の中で、誰よりも強く恐れていた。

過剰な自信も高慢な態度も、すべては霊夢という巨大な傘の下でのみ許された虚構だった。その霊夢は今、魔理沙の前に眠り、明日をも知れぬ身体を力なく布団に横たえている。

魔理沙は、遮るもののない雨の中にいるのだった。そしてその耐えがたい雨粒こそ、霊夢がこれまで戦ってきたもののすべてだった。

「……ゆうべ、空にひびが入るのを見たんだ」

平静を装って発したはずの言葉が、情けないほどに震えていた。

「それがなければ、お前の言葉なんて信じなかった。でも、見てしまったんだ。あれは、世界のひびなんだろ。あれを止めることができなければ、私たちは死ぬんだろ」

藍は、こちらを見ることなく、つぶやいた。

「圧壊する」

式神の言葉は、どこまでも機械的だった。

「大結界は内外の圧力差を調整し、隔てる壁だ。その壁が壊れば、この世界は現実の浸食

を受け、無に向かって収縮し、最後には跡形もなくなる」

その藍の言葉を境に口を開けた、永遠のごとき長い長い沈黙に、堪えかねた魔理沙の精神が食われていく。

「……少し、外す」

さながら幽鬼のような表情で、魔理沙は立ち上がった。頭の芯が痺れている。たった今自分が考えているその思考が、どこか遠くで行われている別人の何かのように思える。背後の障子戸をくぐり、こちらを向いて並ぶ自分の靴につま先を突っこんで、朝日の差す神社の庭をふらふらと裏手に向かって歩いた。夢を見ているようだった。現実もなければ日常もない、ここはいつたいどこで、今はいつたい何だ。

私は、どうすればいい。

気づけば目の前に、閉ざされた玄関の格子戸があった。

現実が、わずかに魔理沙の元へ帰ってくる。

錠が降りていないことはわかっていた。なぜならそれが、不用心な霊夢の悪い癖だからだ。手をかけ、からからと引き開ける。

当たり前の土間がそこにある。右手にはよく手入れされたふたつの竈。左手には備蓄の野菜と漬物の甕。そしてそのすべてを照らす眩しいほどの朝日。そこに、世界をかけて戦う巫女の形跡はなかった。ただ日々を平穩に暮らすひとりの少女の生活が、あるだけだった。

すべてが整然と揃った台所の朝に、彼女だけがない。

「……………」

あいつは、最後まで助けを求めなかった。

当たり前だ。そんなことをするやつじゃない。だからいつも、魔理沙の仕事は勝手に行ってしまったあいつの背中を追いかけるところから始まるのだ。

けれど、今度は違う。

それは、恐ろしい事実だった。

私が、守る。

あいつのいない空を。

しかしそれよりも恐ろしいのは、もしも自分が逃げ出した時、戦うことを拒んだ時、あの満身創痍の霊夢が、再び戦いの場に駆り出されるということだった。

それはともすれば、自分が死ぬことの恐怖にさえ勝るものだった。戦わせる？ あの霊夢を？ 支えがなければ立つことさえ敵わないであろう人間を？

一方的な殺戮や蹂躪を、戦いとは呼ばない。

互いの命が賭けのチップとして機能し、両者の攻防がある程度まで拮抗している状態、戦闘とはそうしたものを言う。

あの霊夢の未来には、鬪り殺し以外の何物をも想像することができなかった。

そしてその結果は、他ならぬ魔理沙の敵前逃亡によって導き出される結果なのだ。叫びだしそうなほどの焦りを呑みこんで、魔理沙はその場にしゃがみこんだ。

戦わなければ。

勝たなければ。

逃げてはならない、負けてはならない、一歩たりとも譲ってはならない。

——霊夢を、守らなければならぬ。

八雲紫の式神は、先ほどとまったく同じ姿勢で霊夢の枕もとに正座していた。

「……答えは出たか」

近づいた魔理沙の影に気づいたのか、振り返ることなく藍は問うた。

魔理沙は、あれほど心の中で繰り返した一言目を呑みこんで、しばしその場に立ち尽くした。

本当に、いいんだな？

いいのだろうか。まだ言わなくてもいいのではないか。もう少し考える時間は残っているのではないか。その上で結論を翻すことだってできるのではなからうか。

たとえ私が戦わなくとも、霊夢以外の誰かが敵を倒してくれるのではないか。

そしてついに、今まで沈黙を守っていたもうひとりの自分が、心の中で口を開いた。

——また、逃げるのか。

それは、かつて家の責務から逃げ出すことを選んだあの日の自分だった。この期に及んでまだ迷いつづける魔理沙の背中を、過ぎ去ったはずの人生の岐路の一点から、着の身着のままの少女が見つめている。

逃げて逃げて逃げ続けて、魔理沙はここにいた。今の魔理沙が立っている道は、かつての自分が選んだ道の続きだ。どれだけ進んでも景色の変わらない暗がりは無我夢中で走り続け、なおも続くこの闇の先にはもう、何もない。

震える拳を握る。

「……ダメだ、私が逃げたら」

荒い呼吸を嚙みしめる。

「あいつが……殺されるんだろ。こうなったら破れかぶれだ。絶対に勝つ。私にもあいつの代わりが務まるって、証明してやる」

その言葉ほどの強気は、魔理沙の内心のどこにもありはしなかった。なけなしの正気を保つためには、虚勢を張り続ける必要があった。

藍は、何も言わぬまま長いことその場に座っていた。そして、おもむろに天井を見上げ、長く深い息をひとつつくと、

「戦ってくれるか」

抑揚の少ない声だった。後ろ姿の彼女の表情は魔理沙からはうかがえず、ゆえにその心境がいったいどんなものであるかは推し量るほかになかったが、続けて藍は、こうつぶやいた。

「覚えておくよ、その言葉」

腹の底に、痛みにも似た重い緊張がのしかかった。代償のない決断などありえなかった。魔理沙の心の中に、何かを為したような達成感と極度の不安とが混在しながら同居していた。藍はさらに続ける、

「具体的な話に移ろう。私はお前の戦いに付き添えない。紫さまもそこは同じ。捕まって取り込まれば最悪お前の的だ。その代わり、間接的な支援なら割と自由にできる」
その言葉の半分ほど魔理沙は聞かなかった。冷たい空気を吸い、言う。

「その前に聞かせろ、式神」

「……ああ、そうだったね。そうだった」

多くを語らずとも、魔理沙の言わんとすることは藍に伝わっているようだった。戦うことを決めた魔理沙には、知らなければならぬことがあった。

藍は、小さく息をついてから、遠くを見つめるようにして言った。

「私たちの敵は、博麗大結界そのものの抱える歪みだ」